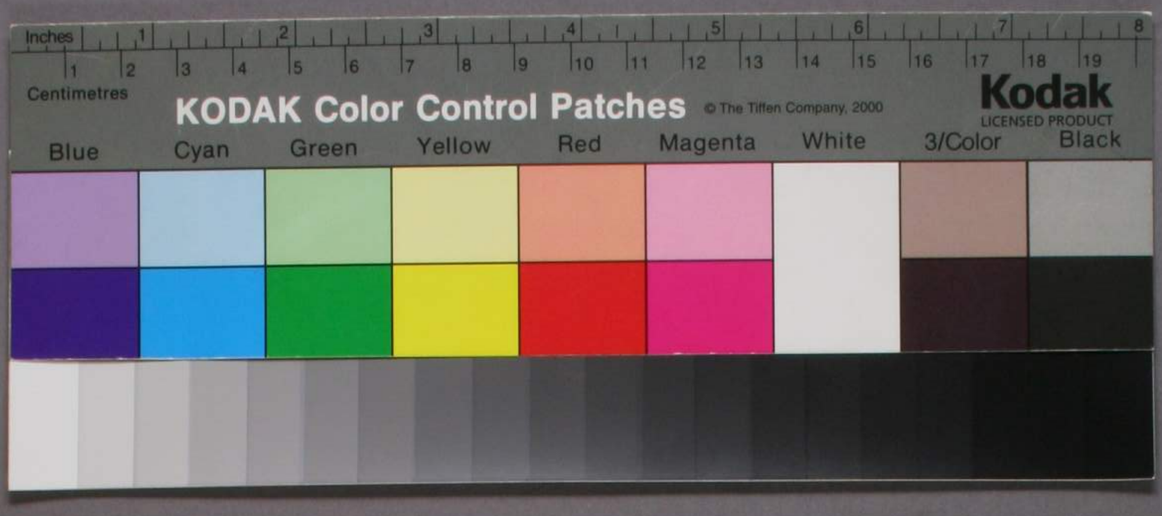
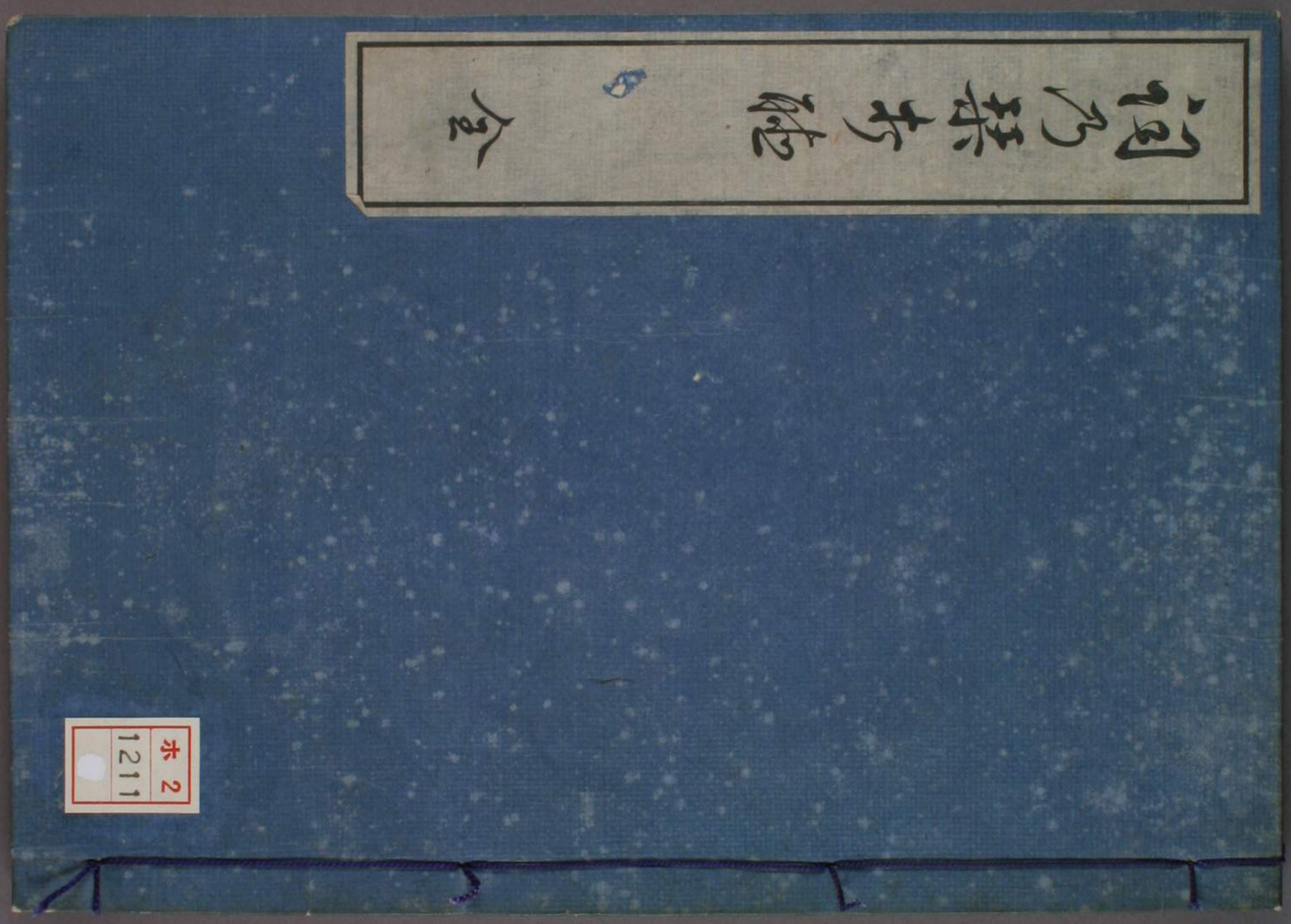

Inches
Centimetres
KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black


ホ 2
1211

門 梅川2
番 1211
巻

黒川真頼 口述
飯田弘恭 編輯

詞乃栞 序聽 全

明治廿三年八月発兌

十八公舎

宮城県図書館蔵書

詞の栞序聽序

今乃世に歌よむ人々ふることよき書読む人は多けれどまた
弟子にしたがはせねる人はあれどもとかく新しきに成
知る人も古きを温ねられずくちきはこまりてあるを
うにえらばれてろ得ぬとなげくひとはかりてかりてよわ
あるをあるがはりに奇をよみ書を読み
古きを温ねて新しきを知りこれをかきまぜをとも知ら
く学びしらしらくかくよりもあつまりくたく
しくおもやるもむすもとえらぶもとらるるはかりわっ
黒川真頼大人はなむありけれそれの中にもことに

言葉の学びにこゝろつくさむ人は御國のてにをはを
せむにはまづかなたこと葉のしるべをはやくしるべきと
ゆかぬにはあまたなる(?)ありし大人さちは初学びのために
詞の栞といふ書をあらはしおかれたり それより詞の八衢
とてふるとは紐鏡とそれ一つにしてとりつかひたまへる辞の玉の緒
にいへりしてふことも考へ合せたる十四轉の名をいれ学
てをとは指辞の挿言をいさめて十更に一目にてくにしたる
さとりやすくものせられたるのちまたんのその三つのふみ
ぞもの中ふるとあやまりもあるをみえたりと おきなひ
られたるの事をとなふなしむにはことばの道もら

まなぶらむなかりせば志ふはあれともまたふかき
紙にとゞまつるものせることなしもうらかくれより八衢
のこと大なるあるをおとろかれとこまやかなる説とよし
くけたえかたきふしもあはれなくてわかるかな大人に
こひてその講釈をききつ 鈴木弘恭ぬしのまさやの
に筆とりて志るしとゞめられたるをあの書のは
そもく紐鏡玉の緒八衢のまなぶらんより後さるかたの
の書をあまたあるかなれとさきのふるきをよむ勞
はうるひとつくへきあかさらのふくみそなへ此書は
とあくれなもせんとのものはのあちひかるらしくまく

よ傳しらぬゆゑなからもなくなりにし日のあはれにたへざる
こゝらせられたく今よ世にあまねく行はれたくさぐさの書どもにハ
あまねくまさりたりなり百とせあまりのむかし天明といひ
しころ本居大人の著されし漢字三音考の序に小篠
敏といへる人の志るせる詞に後の世の人思ふべしと孔子乃
のたまへりしとかや本居先生におきてまさにそのまことを
あらはし給へりといへりけるはあはれ今まで黒川大人に
おきてもしかなむいふべかし時ハ明治十九年の春の末
つかた三田葆光しるす

敍

むかしは人やすくしてあまたのこと思ひと人のことくして
其為すものゝ二つあれ身と心ハ詞によむとはいふ為
くしてなすことの起りの之詞の学ひハ父なる久
しく思ひやすきかた也さての黒川大人さまニ
詞の栞といふぬを撰ありはしてなしたりしか
なやむ人これいと便すらくの栞やすきの人まなひ
はしもなほふくまふハさらむなあきとも為
の栞ふくみてむねむ添へりもしく人の学ぶるな
んこの段階にはあり計ふさせふることのから

のためには貴賤となむよりいはすあふときもなきなる
狂歌ゆかりをよむハあやうしとおもへは
おのれうちきくまゝにかゝれは程なく
なるのかく一巻とハなりたる事をそめしこれ
ことは享保十七年の三月より始めて同十九
年九の三月までをつくり思ひ狂ふちやかるゝ人々
ましく西田江戸人多田親和坂井九るゝ三たとふ狂
坊忠雅か孫古庭黒川も屋鶴丈子松本楠亭
林雅亭よおのれをかくて十人有り一人なれ根
岸林のふるりハなのはりしてやもふたれハこそれ

みのはりて一西田香泥酒井兵庫守女古庭細る
松元雅大久保和雅そかきゝ加へられたる大人なく
なりのゆきむ仍して世よむ人の多きふハ
やまされハ世さハとやむへきゝろやさ歌と優かたる
ことのまくあやさは我かなつかしゐ意なるへし
然ハれこは古今の紀りハあらん詞の字
よくはゆくねたなれとのことわりきは此のうち
きゝ狂よくまて紙くさとりえてこむりハ
学よ学よむ事と詞のまたひとのふるえにお
きては入やまくも来路をと入のこくして

[illegible]

[illegible]

[illegible]

明治二十三年七月　[illegible]

詞乃栞打聽

目録

一詞の栞と名つけ〳〵事

一十四種活用の事

一將然連用終止連體已然言の事

　并ニ希求言使令言の事

一三變格并ニ良行四段一格の事

一形狀言の事

一古格といひてふる〳〵用みさる詞の事

　并ニまどひやすき詞の事

一自他六等の事
一辞ふ五階ある事
一一階の辞の俗解
一二階の辞れ俗解
一三階の辞の俗解
一四階の辞乃俗解
　并ニざにさへすらの事
一五階の辞れ俗解
一指辞ふ五條ある事
一もの徒の指辞の事
一がのれ指辞の事
一ぞやこのれ指辞の事
一何の重れ指辞の事
一こそれ指辞の事
一ぞ何の軽の指辞の事
一ぞの重れ指辞の事
一徒れ重れ指辞の事
一希求使令ふ係るもも徒の事
一變格といふ事
一敬語添言の事

以上二十五條

詞の栞

ことのはれうちうけまどふ人もあらば
しるべふせとまどりるあもとりぞ

黒川真頼

十品種の活用

行名	段名	一の音	一階の辞	二の音	二階の辞	三の音	三階の辞	四の音	四階の辞	五の音	五階の辞
		将然言		連用言		終止言		連躰言		已然言	
カ四	四段	か	ぞ	き	て	く	らむと	く	このなよ	け	だ
サ四		さ	む	し	つ	す	べーヨ	す	なり	せ	ど
タ四		た	む	ち	けり	つ	めりヤ	つ	を	て	ヤ
ハ四		ひ	なむ	ひ	なむ	ふ	まーナ	ふ	と	へ	ナ
マ四		み	ず	み	し	む	なりな	む	むなりモ	め	ども カシ
ラ四		ら		り	そ	る	だりモ	る	がよカシ	れ	
ワ一	一段	ゐ		ゐ		ゐ		ゐ		ゐ	
ヤ一		ゆ		ゆ		ゆ		ゆ		ゆ	
マ一		み		み		み		み		み	
ハ一		ひ	む	ひ	む	ひる		ひる	を	ひれ	
ナ一		よ		ふ	つ	まる		まる	なり	まれ	
カ一		き	ぞ	き	て	きる	らむと	きる	このなよ	きれ	だ
著	居	ゐ	だ	ゐ	そ	ゐる	ハタ	ゐる	えるがよ	ゐれ	ども

カ中二	タ中二	ハ中二	マ中二	ヤ中二	ラ中二	ア下二	カ下二	サ下二	タ下二	ナ下二	ハ下二	マ下二	ヤ下二	ラ下二	ワ下二
中二段						下二段									
起	落	戀	恨	老	舊	得	受	痩	捨	兼	弁	譽	消	枯	植
き	ち	ひ	み	ゐ	り	え	け	せ	て	ね	へ	め	え	き	ゑ
ぞ	む	ヨ	な	ゐ	だ	ぞ	む	ヨ	な	ヨ	む	だ	ゑ	ゑ	ゑ
き	ち	ひ	み	ゐ	り	え	け	せ	て	ね	へ	め	え	き	ゑ
て	つ	け	な	し	そ	て	つ	け	な	し	そ				
く	つ	ふ	む	ゆ	る	う	く	ぬ	ふ	む	ゆ	る	ぬ	つ	ぬ
らむと	べ	めり	なり	むろ	がよ	らむと	べ	めり	なり	むろ	がよ				
ヨ	ヨ	ヤ	ナ	な	モ	ヨ	ヤ	ナ	な	モ	カシ				
ゐる	ゑる	ゑる	ゑる	ゑる	ゑる	ゑる	ゑる	ゑる	ゑる	ゑる	ゑる				
なよ	なり	をと	むろ	がよ	ぬる	なよ	なり	をと	むろ	がよ	ぬる				
れる	れる	れる	れる	れる	れる	れる	れる	れる	れる	れる	れる				
だ	ど	む	だ	ど	ども	だ	ど	む	だ	ど	ども				

カヘン	サヘン	ナヘン
加行變格	左行變格	奈行變格
来	為	往
こ	せ	な
ぞ	ぞ	ぞ
む	む	む
なむ	なむ	なむ
だ	だ	だ
ヨ	ヨ	ヨ
と	そ	ね
ヤ	ヨ	ヤ
カシ	の	カシ
そ	ち	ど
き	け	し
く	き	く
らむと	らむと	らむと
べ	べ	べ
ヨ	ヨ	ヨ
めり	めり	めり
ヤ	ヤ	ヤ
まど	まど	まど
なり	なり	なり
ナ	ナ	ナ
むろ	むろ	むろ
な	な	な
モ	モ	モ
がよ	がよ	がよ
カシ	カシ	カシ
ハタ	ハタ	ハタ
る	る	る
なよ	なよ	なよ
なり	なり	なり
をと	をと	をと
むろ	むろ	むろ
がよ	がよ	がよ
ぬる	ぬる	ぬる
れる	れる	れる
ど	ど	ど
む	む	む
ども	ども	ども
ヨ		
と		
ヤ		
カシ		
ど		
ども		

ラ品一

良行四段一格

有居

ら

ぎ む な

り

て つ け り な む し

り

と ヤ カシ ハタ

る

む ら べ め り ま で

れ

ぞ ど ども

と ヨ ヤ ナ カシ

ラ品一

四段の五音より四段の音より

飽押打思住釣

ら

ぎ む ぞ

り

て つ け り し

り

と ヤ カシ ハタ

る

む ら べ め り ま で

れ

ぞ ど ども

と ヨ ヤ ナ カシ

ラ品一

クシキ シク シキ クシキ

ク シ シキ ニ の ヨリ

浅深有 淫欲有 悲思有 懇慕有

ら

ぎ む な

り

て つ け り な む し

り

と ヤ カシ ハタ

る

む ら べ め り ま で

れ

ぞ ど ども

と ヨ ヤ ナ カシ

クシキ シキ クシキ

く し き し く き 一格

浅深 懇慕 悲思 善

み

て と そ

み

て と そ

け む

て と そ

と そ ヤ ナ モ カシ ハタ

と そ ヤ ナ モ カシ ハタ

と そ ヤ ナ モ カシ ハタ

さ

と ヤ ヨ ナ ヲ ヤ ダリ ムラ

さ

と ヤ ヨ ナ ヲ ヤ ダリ ムラ

さ

と ヤ ヨ ナ ヲ ヤ ダリ ムラ

き

と ヨ ナ ヲ ダリ ムラ

き

と ヨ ナ ヲ ダリ ムラ

き

と ヨ ナ ヲ ダリ ムラ

れ

ぞ ど ども

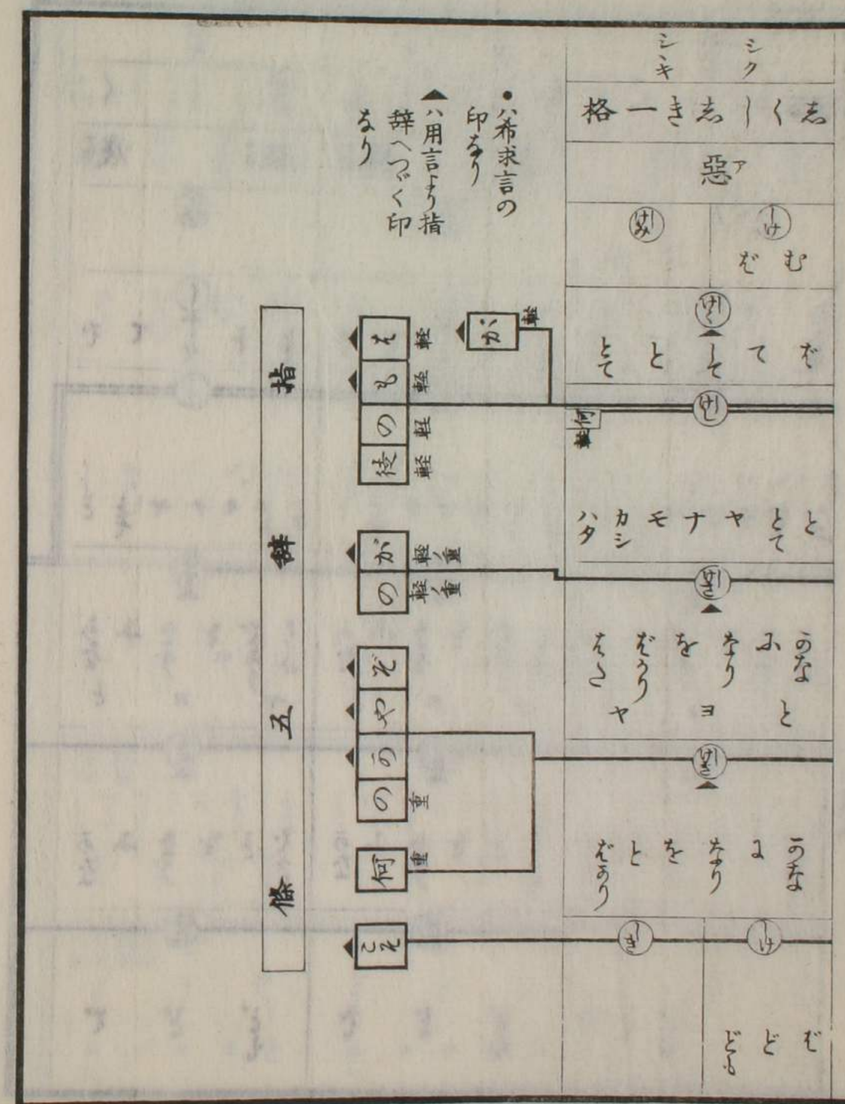
れ

ぞ ど ども

れ

ぞ ど ども

き け き



詞乃栞打聽

黒川真頼 口述
鈴木弘恭 編輯

○詞の栞と名づけし事

これを詞乃栞と名づけるゆへ、別ふふのき意はあらぐ、おのれぞこのふるぶかきをくゝよえる歌ふ、

おとのをれみちをけまどふ人をあらば
しるべふせよとしはるゝをりぞ

ときとしあきつるふを、一ゝるゝりハ心えらるゝことをらむ、さて志をりといふことハ、山深くゝはけ入るゝまゝ、木の枝を折

このけて、道のきるべとふることふて、一度志ゑりをしておけば、いつもその志をり紙目的ふしてとけ入らるゝなれば、それふゐくらくてかくい名づけたるなるそもくいるへの書をたどりてゆのまるびせむるハ、詞のまるびをもとゝし、さてゝろゐのふゝをよみとくゐきなりさるを初學（クヒマナビ）の輩を思ふのゝ意を用ゐて、解きぞ〳〵記ふ〳〵のあるよなやめるハ、此の道より見けいらぬゆゑぞか〳〵かの學びふ心ざゝむ人をまづこゝろちより見参入らば、いあふ志げき文の林なりとゝえたいやをくゝけいらるゝものぞよされバそのおほむ初をつぎ〳〵ふさとゝくべし、

因ふ云ふ、詞ふ於て一の音二の音といふハ、五十音の一二の順序（ツイデ）と異あり、五十音のうち第五の音ハ詞の活用ふハ入らぬ音なれバ（加行變格例外なり）ハ是を省きて、残りの四段を詞の活用の段階とハもるあり、故ふ四段活用とハ、悉く四段ふ活用するものをいひ、一段活用とハ、第二の音の一段のみよて活用もるものをいひ、中二段活用とハ、上下の二段（即ち一の音四の音）を省きて中の二段（即ち二の音三の音）よて活用するものをいひ、下二段活用とハ上の二段（即ち一の音二の音）を省き、下の二段（即ち三の音四の音）よて活用するものをいふなり、次の圖を見て知るべし、

○十四種活用の事

作用言、形狀言の名目ハ、既ふ先達の名付て、さてその活用を十種ふ定めおきたるを、今十四種とせしハ、おのれゞ定めつるなり、そハいかゞといふふ、十種まてハことたらぬなり、まづ十種とは、人の家ふあるとふれバ、四段活用一軒、一段活用一軒、中二段活用一軒、下二段活用一軒ありて、以上四軒あり、外ふ三變格といふ分家の如きもの三軒あり、加行左行奈行あり又良行四段一格といふ活用あり、詞の八衢ら行四段の條ふ云く、ついさゝか異なり云々、又義門法師も右ふ舉ゝる詞の中ふ、有居の二和語説畧留ふ、有の一格をおきしかど、用ゐやうふ因りてハ形狀言となるあり、故ふ此の良行

四段一格の一軒ハ、作用言と形状言との間ふ置きて、以上八軒を作用言といふ、

次ふくしき活用一軒、ちくしちき活用一軒あり、是を形状言といふ、この二軒を上の八軒ふ合をて、都合十軒となる、是を十種活用といふ、これ先達の定め置てる區別なり、さてもとハ右十種なるを、十四種ふ増してるゆゑハ、良行四段一格といふものハ、前の一軒のみをいまゞこゝをたらぬが故ふ更ふ一軒をしてあり、こゝまふ四段活用の第五の音よりうつる格ふて飽けらむ押せらむなどいふ類あり、前のら行四段一格ふハ、二階ふそふるむと受る辞あれども、此の所ふハなむと受るてふをはあし、

又くしき ちくしちき二軒より移る一格ありて、上二種の良行四段一格と異あり、そハからかるかれと活く詞すて、浅うり戀しうりの類なり、前のら行四段一格ふハ、二階ふそと受るてふをはあし、と受る辞あれども、此の所ふハそへたり、以上十二軒なり、

又形状言を二軒増加しるゆゑハ、古事記万葉集などの歌ふよろむあしろむ、よけくあしけくなどいふ詞あり、後の世の詞ふ、善く惡しくといふふ意ハ同じ、然る故ふくしきと ちくしちきとふ、各一軒づつをくへり、以上十四軒こゝ十四種活用なり、委しくハその條々ふいふべし、

○將然連用終止連體已然言の事

并希求使令の事

將然言連用言終止言連體言已然言と第一の音より第五の音まで区別あらるゆゑハまづ第一の音の將然言ハ未こらむとする詞あり故ふむの辞をそへてこゝろみるべし飽あむ押さむ打たむ思えむ住まむ釣らむなどいふゞ如しこれ將然言と名づくるゆゑなり、此の事ハもやく詞の通路ふもいつり、

次ふ連用言ハ用言より用言ふ續くをいふさて連用言ハてもゞあるを例とえてもゞなきと紀ハかりよ添て見るべし、必ゞ省きさるものゞゑとへバ咲きちるハ咲きてちるといふことなり行きをぐハ行きてをぐといふことなり咲きて行きてハ用言よりて過ゝることなり、ちるをぐハ用言よりて今のことなるをかやうふ連ねて用ゐるゞ故ふ連用言といふなり、

次ふ終止言ハいひはてゝ止む詞なり、先達ハ截断言といへり是ハ若狭の義門ゞ名付しなり然れども允當ならゞ其のゆゑハ天地の間のその皆始終あり、これハ強て截るふ非ゞしてゝ自然ふきるゝ意なり、たとへバ繰溜ある糸をまろむふ、すき終りてゝ止むゞ如し故ふ今終止と改めしり、山海経よふ書の終りふ終止となり、終止の字これふよまるゝされバ終止言とハ自ら詞のいひ終りする我いふ名目なり、この詞も

もの徒の結ひ詞となる、徒とハ指しらる辞無きをいふあれ
バきハめて軽き格あり、その極めて軽き徒をもこの詞して
結べバもの〻軽きことも推して知るべし、されハち
これ糸の巻き終りて止むが如くあり、故ふ終止言といふな
り、

次ふ連體言ハ、用言より體言へ續く詞なり、ちこのれどもぞや
この何、うりかくれむ、切るく格あり、是ハ切れぬ詞あれど、ぞ
やこの何乃指辞ふ應じて切るく ぞ故ふ、連體言の結びて甚
力あり、右の如くぞやこの何ふ應ぜれバ切るく あれども、つ
ねハ續くぞ詞の性質なり、さて此の詞ハつねハ體言ふ連り

續く性質なるぞ故ふ、是を連體言といふなり、

次ふ已然言ハ、已ふ然る意あり、ちこのれども是も允當ならば、
已然などいふハ心よくもなくれども、相當の文字見當らね
むたゞもとのまゝふておきつたとへバ風ふけバといへむ、
先刻のらふく風の今ふいるりて吹てあることあり過去よ
り現在まで吹てあるをいふなり花さけバといへバ已ふ咲
る花ぞ今ふ至りてある意あり、凡て已然言ハ、過去より現
在までふ関係あり、ゆゑふあのれハちらあれるとあるとを
兼ぬるものと定めたり、

四段一段中二段ハともふ五十音の中、六行づゝふ活用し、下

二段のみハ十行ともふ活用するハ、皇國言語の自然なるべし、志こうるを詞ハ衢ふ、見ねうゑをのゐを一段と中二段と兩方ふ入まて、中二段を七行の活きとせしハ誤あり、

又ハ衢ふ、一段のゐを安行のいとして、初めよりおきたるもろ〳〵、一段のゐハ也行のゐあり、

又こゝふ一言いふべきことあり、希求使令ハ四段活用まてハ第五の音ふ屬まれど、已然言ふあらぶ、希求使令とハ、いむ、ゆる下知の詞まて、四段まてハ、あけおせうておもへまめつれの類、一段中二段、下二段まてハ、着よ見よ起きよ落ちよ得よ受けよといへる類る希求使令ハもの徒を受てむすぶの例なり、四段活用ハ、第五の音よ希求使令あり、一段中二段、下二段ハ第一の音ふ希求使令あり、四段活用の五の音まていまぐもの徒をうけて切るゝ時ハ、希求使令まて已然言ふあらぶ、一段中二段、下二段の一の音ふていまぐもの徒をうけて切るゝ時ハ希求使令まて、將然言よハあらざるあり、古人云、一段中二段、下二段ハ一の音よハ希求使令あるべうらぶ、一の音ハ元（モト）より詞をなさぶ、詞をざる言あり、故ま二の音連用言に希求使令を付る方穩當なるべしと、これも一應ハ尤のやうなり、志かれども連用言をもて希求使令としてハ、其の理のなれぶ、其の證ハ變格ふ於ては必（ヒツ）一の音より希求使令を受る確證あり、そはいろふとならば、

加行變格　こよ　佐行變格　せよ

是らの如く、此の例を推して見れば、一の音より受るを以て至當とをべし、さて又四段は五の音、一段以下は一の音ふ、・・・・・・の印を付けたるは、希求使令を示したるあり、又こゝふ一言いふべきことあり、奈良朝以上は、四段の五の音はよもぎふくしゝ希求使令となり、万一「ひくま野ふにほふもり原いりみだりころも涌保波勢あびのちゝに万三「いへ思ふとこころすゝむる風まちてよくして伊麻世あらきそのうちに」奈良朝以下もまれまは、下二段の一の音ふよもぎを添へゞしゝて、希求使令とせるもあるなり、○古今俳諧「ふしのねのるらぬおもひよもぎばるを。神ぞふけゝぬむすゝ久ふりを堀川百首「たやらどもをふねさゝまぜ。このみゆる島根のえちを折らまくもほゝ」

又意はあすゞくして、四段と中二段と二かゝふ活く詞あり、こきは四段の方古くして、中二段の方新らしゝ、その證は忍ばむ忍び忍ぶ忍べといふは四段活用あり、中二段まては忍び忍ぶ忍ぶる忍ぶれといふ、此の忍ぶるといふ活用は、奈良朝ふは聊もなることなる、又紅葉を四段まてもこだむもらぢもみづもこでと万葉まふいへれど、もらぢむもみづると中二段ふ活用したるは、万葉まは見ゑず、平安京以来の歌より見ゑてこそり、是もまゝ心得おくべし、

○三變格并ニ良行四段一格の事

前まもいくゝるゞ如く、加行、佐行、奈行、まは變格の活きありて、

これを三變格といふ、これハ四段まも一段まも中二段まも下二段ふもその定格ふあらぬ活用あれバ、變格といふなりさて又詞ハ衢まハ、右三變格のミを載るを今新るよ良行四段一格といふものを三種あるたるハ、前まもいへる如く、良行四段活用とハ異なるゆゑあり、いづれも詞の栞を見てゐきまふべし、

○形状言の事

形状言ハ、いをゆらく〜しき、ちく〜しきの二種あり、即ちく〜きハ淺く、深く等の類、ちく〜しきハ戀〜く、悲〜く等の類ゑて、皆上ハ體言あり、淺ハあさ深ハふの戀ハこひ悲ハかあの體言ふく〜しき、ちく〜しきの活の添ハりゑるあり、此の外も體言ならざれバ、形状言ハつゑぬものと心得べし、

前まもいへる如くこれゑ又一格といふものを二種加へたるハ、善く、善〜、善き、善けく、善け〜、善けき、善け、善き、といひ、惡ちく、惡〜、惡〜き、惡〜けく、惡ちけ〜、惡ちけき、惡〜け、惡〜き、といふ類なり、此の格ハ古言ふ多〜さて此の條の已然言のことハ次の條ふいふべられバ見合せてさとるべし、

○古格といひて古く用ゐる詞の事并にまどひやを

き詞の事

古格といふハ、古事記、日本書紀、万葉集などゑ見をてる格ふ

て、平安京以後まゝ、大あるゝハ用ゐぬをいふなり、さて古格ふ
於てハ、已然言を受るゞ彼省けるあり、
五四 真野の浦のゝどのつぎ橋心ゆもおもへや妹ゞ夢ふ〜見ゆる
万六 湯の原ふなゝくにゝたづハ我ゞ如く妹まこふれや時ゝとのゞ鳴く
あすへやハ、あすへをやあり、
こふれやハ、こふれバやなり、
又くゝきゝりうつる良行四段一格の活用まゝ、将然言のか
らをつゞめくゝのといへるゞ多し、
万四 うまぐゝのねろまかくりゐかくだるも國の遠ゝのゞなゞめぼりせむ
同 いゝほろのそひのむり原ねもころよ奥をれるゞそまさこゝよゝのゞ
遠ゝのバハ、とほゝのらバなり、
よゝのバハ、よゝのらバなり、

又くゝきゝ一格ゝくゝきゝ一格活用の已然言のけゝけハけ
れゝけきをつゞめたるなり、そふ
万七 玉ぼこのうちのとほけバまぼこのひもやるゝもあゝ云ゝ
万五 あをふゝまらの大路をゆきよけど此の山道ハゆきあうけを
事記 はゝたそのくらは山ハさゝけどいもとのぼれバさゝくもあらゞ
万七 くれるゞふころゝそめまくほゝけどもきてふぼけだや人の考べき
とほけゞハ、とほけれゞなり、ゆきよけどハ、ゆきよけれ
どなり、さゝけどハ、さゝけれどなり、ほゝけどもハ、
ほゝけれどもなり、此類多し、
又同〜一格の已然言のきゝきハけゝけの轉せるものゝ、
連體言のきゝきとハ異なり、

仁德記ころもこそふるへもよきさゆどこをならべん君いの〜こきろのも

五十一わ〜このそこおきをふらめておゐるものとるいまこそこひすへなき

よきハよけれなり、なきハあけきなり、この類なほあり、

又古事記日本書紀などの歌ふ、のな〜きろこのもあふときろ

のもなどあるろもじハ嶺呂、妹呂、麻呂、などのろとおれど詞

あれど、嶺呂妹呂麻呂あどく體言に添ハりたるハ親愛の意

を含めり、まこあふときろかあ〜きろとやうふ、用言に付き

たるハ、親愛の意ハなくて、まこく助辞なりと知るべし、

反語のやこれを疑嘆のやといふもて切るこふもどろ〜きあり、其の例ハ

五十三河風のさむき初瀬をなげきつ君があるくふ似る人もあへや

五十一あづさゆきをゑの原野ふとかりもる君がゆづらの絶むとおもへや

五十四うゑ原のねやいら小菅ねもあれば君ハ見くらく我忘るまや

五十五なるさもむる心〜あくハあまさうひなふひと日もあるべくあまや

あへやハ、あハめやの約言、おもへやハ、おもまめやの約言、忘るまやハ、忘するらめやの約言、あれやハ、あらめやの約言なり、

かやうなるハ皆ハめらめの約言にてめハむの轉ぜるあり、

是らのやハ疑嘆のやにて俗言のカイといふおれど、

又咏嘆のやの中ふまどい〜きあり、其の例ハ

五十二ゐこひのちへの一重もなぐさむこころもあれやと云々

五十六玉藻ゐるかちり礼島ふ行さうもる鶏にもあれや家思ハざらん

万葉集 いまくらの小野ゆ秋津ふ立渡る雲まもあれや時をまもむ

是らハ使令言ふつく咏嘆のやまて、ヤアと解きべきやあり、

さて上のれやと此のきやとあれどすべなれど、各々意こと

まて、初學のとまどらせまどひやをるだけきを、因ふつき

まへおくなり、

○自他六等の事

詞ハ本と自と他と三等なり、然きども是を細別をるときハ、

然る詞ハ、おのづから然る詞と、みづから然る詞との區別あ

り、然する詞ハ、自然をる詞あり、他ふ然せさをる詞あり、然せ

らるる詞ふ、おのづから然せらるゝと、他ハ然せらるゝとの

區別ありて、六等とハなるあり、さて是を分るふハ、まづ三等

を知るべし、三等を知るまハ、本詞ハせれを付て試るとき

ハ、明白ふさとる知らるべし、

あるとへバ、四段の飽ハ本詞なり、これハせれをはきてあらせ

あのれをなるゞ如し、則一の音より、下二段の佐行良行ハ移

しを試るべし、凡て四段ハ、一の音かさたはまらより、せれへ

うつる例あり、一段中二段、下二段ハ、さらの一の音を、中ふ加

へて、一段ならバ、見させ見られ、中二段ならバ、起させ起られ、

下二段ならバ、得させ得られとやうハ、佐行良行へうつしを

試るべし、其のうち一段ふ限りてハ、させを約めていふことあ

て、例をいたゞ見させを見せ着させを着せといふ類なり、
さて此三等より、六等ふ別るゝ、訳ハ、四段のあらむあきあく
あけといふハ本なり、是を佐行下二段ふうつしてあらせあ
らせあらせるあらせれといへば然る詞なて自なり、又是を
良行下二段ふうつして、あるれあうるあうるあらるれとい
へど、然せらるゝ詞なて他なり、今一二をあげて左ゴとゝ、

本四段　あく　シカル詞ナリ
自下二段　あらせる　シカスル詞ナリ
他下二段　あらるゝ　シカセラル、詞ナリ

右ハ三等なり、是を六等ふ區別れば左の如し、

本四段　あき　カ四段　あく　オヅカラシカルナリ
　　同　　あく　ミヅカラシカルナリ
自下二段　あらせ　サ下二段　あらせる　ミヅカラシカスルナリ
　　同　　あらせる　他ニシカセサスルナリ
他下二段　あうれ　ラ下二段　あうる、　オヅカラシカセラル、ナリ
　　同　　あうるゝ　他ニシカセラル、ナリ

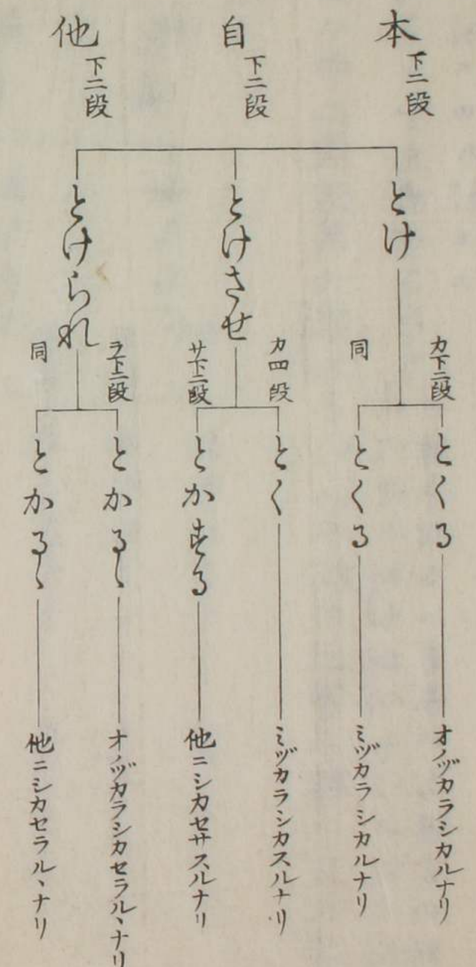
右ハ四段活用の飽くといふ本詞の三等ふ轉し、又六等ふ別
るゝをあめせるなり、

- 本 一段
  - 見 ヤ下二段
    - 見ゆる ―― オヅカラシカルナリ
    - 見る ―― ミヅカラシカルナリ マ一段
- 自 下二段
  - 見させ 同
    - 見する ―― ミヅカラシカスルナリ サ下二段
    - 見せさする ―― 他ニシカセサスルナリ
- 他 下二段
  - 見られ 同
    - 見らる、 ―― オノヅカラシカセラル、ナリ ラ下二段
    - 見らる〻 ―― 他ニシカセラル、ナリ

右ハ一段活用の見といふ本詞の三等ふ轉ド、又六等ふ別るゝを志めせるなり、

- 本 中二段
  - おち 同
    - おつる ―― オノヅカラシカルナリ タ四段
    - おつる ―― ミヅカラシカルナリ
    - おとす ―― ミヅカラシカスルナリ サ四段
- 自 下二段
  - おちさせ 同
    - おとさする ―― 他ニシカセサスルナリ サ下二段
- 他 下二段
  - おちられ 同
    - おちらる、 ―― オノヅカラシカセラル、ナリ ラ下二段
    - おちらる〻 ―― 他ニシカセラル、ナリ

右ハ中二段活用の落ちといふ本詞の三等ふ轉ド、又六等ふ別るゝを志めせるなり、此の所ふおち おつといふ詞のおとてち ニ音 のと 五音 の轉ドたるハもるハち轉言の例ふ



右ハ下二段活用の解けといふ本詞の三等ふ轉じ、又六等ふ別るゝをあめせるなり、

大うゝはこれらの例なぞ、此のほゝハ皆準らへ知るへし、

又四段活用の習ハむ匂ハむなどいふことばを、佐行ふ移して習ハさむ習ゝ匂ハさむ匂ハゝといふことあり、是ハ自ふのゝかゝる詞なり、

捨遺 手枕のすきまの風もさむうゝ紀身ハならいゝの物ぞ有ける

古今 なふ人うきてぬぎうゝ藤袴くる秋ごとふ野へをまほハゝ

まる詞ふもふゝこのゝらいゝけるふなどあり、是らハ皆同格ふりゝさてこのならいゝをならハせまほいゝせこのよハゝをこのよハせとハ云ぬとゝ、のゝまほゝせこのよゝせならハせなどいふ時ハ自ふあらゝして他ふ然せさせる詞となるなり、

捨遺 梅うゝの弥さくらの花ふまほゝせゝ柳ゞ枝ふさこのせてゝゝゞふ

源氏紅葉賀てほんうきならいせなどして云く

これらの類なれバ、よく味をひてさとるべし、

○辞ふ五階ある事

詞ふ五階ありまづ作用言ハ、将然連用終止連體已然の五種あれど、隨て辞(テニヲハ)も五種の區別ある道理なり、さて形状言ふ至りてハ、六階なれど辞もまた六種ふわかるれど大うゝハ作用言ふおなじけれど、その五種の辞をよく心得なば、形状言の六種の辞ふも通ずべし、

○一階の辞の俗解

栞ふ載せるハ、ぞむなむぞの四種なれども、是ハ目標(マシルシ)をあげたるまてぞハぞぬ祢と運用(ハタラ)き、むハむむめと運らく類をよく心得べし、但し左の辞の上ふ○印を付したるハ、一種のけじめの運用と知るべし、○印のなきハ、おれど種類の目標なり、下られふ準ふべし、

○ぞ　ナイ　ぬ　ナイデアル　祢　ナイガマア

デアルハヂヤと同じいづれも適宜なるべし、

ぞ　ナイデ　ぞハ續くときハ、デをすじを添てナイデと解べし、

ど　ウデアルマイ　ヤウデアルマイ　どハ、ぞの轉語なり、

で　ナイデ　でハぞての省畧なり、此の辞古くハなし、

ぞなり　ナカツタワイ　ぞける　ナカツタデアル　ぞけれ　ナカツタガマア

ざり　ナイデアリ　ざる　ナイデアル　ざれ　ナイデアルガマア

ざりハ、ぢありの約言なり、

ざらむ（ナイデアラウ）	ざらむ（ナイデアラウデアル）	ざらめ（ナイデアラウガマア）	

ざらむハ、ぢあらむの約言なり、

○

む（ウ ヤウ）	む（ウデアル ヤウデアル）	め（ウガマア ヤウガマア）	

まく（ウコト ヤウコト）	まく（延言なり、）		
まし（ウデアリマシヤウ マシヤウ）	まし（ウデアリマシヤウデアル マシヤウデアル）	まし（ウデアリマシヤウガマア マシヤウガマア）	

まし、のまハ、むの轉語なり、

○

なむ（ウナラヨイ ヤウナラヨイ）	

○

む（ウナラ ヤウナラ）	

○

ヨ（ヨ）	

此ヨハ一段、中二段、下二段等よあり、四段よハ五階ふあり、これハ希求使令のよなり、故ふ片假字よこのきてこれを區別せり、

是らの類ある、但しむなむなどの三ハ、ウ云々ヤウ云々と二様ふ俗解を付したるハ、四段言のときハ、ウ云々なり、一段、中二段、下二段言のときハ、ヤうを加へてヤウ云々と俗解をる例あれバなり、但し近古の俗よ、ヤうあ〜ふ、著む起む得むを、キウオキウエウともいへり、これもまた心得あ〜べし、

○二階の辞の俗解

栞ふ載たるハ、てつけりなむ〜その六種あれども、これも目標をなげるるみそおの〜種々ふ分ろ〜こと一階の條の如し、

○て　テ

てむ　テアラウ　テヨカラウ
てむ　テアラウデアル　テヨカラウデアル
てめ　テアラウガマア　テヨカラウガマア

てまし　テアリマシヤウ
てまし　テアリマシヤウデアル
てましう　テアリマシヤウガマア

てむ　テアラウナラ

てけり　タワイ
てけり　タデアル
てけれ　タガマア

てき　テアツタワイ
てし　テアツタデアル
てしう　テアツタガマア

てしゞ　テシテアリタイモノギヤワイ

此辞ハ願の意なり、

てしゞれ　テシテアリタイモノギヤワイ

是も願の意なり、

此外ハてハても、あどあるハ、皆こゝの分家の如くハ見ゆれども、てハマアといふ咏嘆の意のハもの添ハりさるものまてまことの分家ハてのらびゝ、

たり　テアリ
たる　テアル
たれ　テアルガマア

たりハてありの約言なり此の外ふたらびたらびたらむたらまし などの類ハ皆分家なれども、くゞくしけれバあげびゝ、上の例よなそらへて考へ合すべし、

○つ　タワイ　テシマウタワイ
つる　タデアル　テシマウタデアル
つれ　タガマア　テシマウタガマア

此のつつるつれハ半過去の辞なり、さてとつとハもと一軒なれど、古くより分家して二軒とハなりたれ、まこの所の解をタワイとテシマウタワイと二様ふ付考へるハ、全略二様あるを考めしあくなり、テシマウタワイハ全の解なり、タワイハ畧の解なり、

つゝ　何ッ　何ッ
つゝハつの連用言なり、たとへバ見つゝハ見ッ見ッと解もべし、

つらむ　タデアラウ　タデアラウデアル　つらめ　タデアラウガマア

つらし　タサウナ　タサウナデアル　つらし　タサウナガマア

つべし　タテアルベイ　つべき　タテアルベイデアル　つべけれ　タテアルベイガマア

此の外ふつもつやなどあるハ、例の咏嘆のマアカイの添ハりたるまでこゝの分家ふハあらざること、上の條ふ準へて知るべし、

○

けり　タワイ　テキタワイ　ける　タデアル　テキタデアル　けれ　タガマア　テキタガマア

此のけりにもけきにもつつるつれの如く全略の二様あり、タワイハ略のけりの解なり、テキタワイハ全のけりの解なり、

けむ　タデアラウ　けむ　タデアラウデアル　けめ　タデアラウガマア

けらし　タサウナ　けらし　タサウナデアル　けらしな　タサウナガマア

此のけむけらしの條も上のけりの如く解て全略の二様あり、けむハタデアラウテキタデアラウなり、けらしハタサウナテキタサウナなり、おしてを知るべし、

○

なむ　テイナウ　なむ　テイナウデアル　なめ　テイナウガマア

此のなむハ俗ていナンのなむとも常のなむともいふ、

なます　テイニマシヤウ　なます　テイニマシヤウデアル　なます　テイニマシヤウガマア

なく　テイナウナア

なば　テイナウナラ

なで　テイナナイデ

ふけり　テイインダワイ　タワイ　まける　テイインダデアル　タデアル　まけれ　テイインダガマア　タガマア

此のふハ上のなと同意のふあり、

まけむ　テイインダデアラウ　まけむ　テイインダデアラウデアル　まけめ　テイインダデアラウガマア

まけらし　テイインダサウナ　まけらし　テイインダサウナデアル　ふけらし　テイインダサウナガマア

ふき の次ゝ
ふーゞ
ふーゞふ
又次下ある〔ー〕の次ゝ
ーゞ
ーゞな
と挙ぐべきを此ふゝ省けり多く用ゐぬ辞なれバあり之の俗さハ上の條ある〔てーゞ〕
てーゞな〔ゝ準へて知るべし〕

ふき　テインデアツタワイ
ぬ　テインダワイ
ぬべーー　テイヌベイ
ぬべらなり　テイヌベギヤウヌダワイ
ぬらむ　テイヌルデアラウ
ぬらー　テイヌルサウナ
ね　テインデタモレ　テインダガヨイ

此のぬ』も上のな』と同意のぬ』なり、

ー　テアツタデアル

此のー』ハ次のき』ー』ー』のと運らくー』なり、例ゝよらばき』をあゞぐべきなれどもー』を擧ゝるハ志ー』とせー』との區

ま　テインデアツタデアル
ぬる　テインダデアル
ぬべき　テイヌベイデアル
ぬべけき　テイヌベイガマア
ぬべらなる　テイヌベギヤウヌデアル
ぬべらなれ　テイヌベギヤウヌダガマア
ぬらむ　テイヌルデアラウデアル
ぬらめ　テイヌルデアラウガマア
ぬらー　テイヌルサウナデアル
ぬらー　テイヌルサウナガマア
ぬれ　テインダガマア
ふー　テインデアツタガマア
ぬ　此のぬ』も上のな』と同意のね』なり、
ー　テアツタデアル
ー　テアツタガマア
ー　テアツタデアル
ー　テアツタガマア

別を早く志らしめむとてなり、

き　テアツタ

此のき』ー』ー』ー』の見やうハ、其のもの〳〵今ハ其の所ふおきをさゝ辞と知るべし、故ゝ此のー』を過去のー』といふなり、

○そ　コトナカレ

此のそ』ハ勿れのな』をまづいひて、か何そと結ぶ呼あひのそ』なり、此そ』ハ俗ふナナニソのそ』といふなり、ぞと濁ることなるべし、

△らむ　ルデアラウ
△べー　ルベイ
△と　ルト

△らむ　ルデアラウデアル
△べき　ルベイデアル
らめ　ルデアラウガマア
べけれ　ルベイガマア

是らの類なりさをこれふ△の印を付したるらむべー』との

三種ハ、いづれも古格にて、一段活用の二階ふのみある辞なりと知るべし、

○三階の辞の俗解

栞ふ載たるハ、らむ べし めり まじ なり ごろ ふ ハタとヨヤナなモカシの十五種あれども、是も目標をあげしるすにて、あの〳〵種々ふ分るゝこと、一階、二階の條のごとし、

○らむ ダラウ

らむ デアルダラウ	らめ ダラウガマア
らー サウナ	らー サウナデアル	らーき サウナガマア
	らー サウナガマア

○べー ベイ

べき ベイデアル	べけれ ベイガマア

べーハ昔も今も同ド詞なり、物語などよべいと有も同意ゝ、

べらんず ベクナイ	べらぬ ベクナイデアル	べらぬね ベクナイガマア
べらんば ベクアラウナラ	
べらんすり ベクアルワイ	べらんある ベクアルデアル	べらんなれ ベクアルガマア
べらんけり ベクアツタワイ	べらんける ベクアツタデアル	べらんれ ベクアツタガマア
べらんらむ ベクアラウ	べらんらむ ベクアルダラウ	べらんらめ ベクアラウガマア
べらんらー ベクアルサウナ	べらんらー ベクアルサウナデアル	べらんらー ベクアルサウナガマア
べらんなり ベキサマナリ	べらんなる ベキサマデアル	べらんなれ ベキサマデアルガマア
べゝ ベキヤウスサニ	
べく ベク	
○めり トミエルワイ	める トミエルデアル	めれ トミエルガマア

めり ハ推察の意なり、

○まじ　マイ　まじき　マイデアル　まじけれ　マイガマア

まじく　マジク

○なり　ワイ　ふる　デアル　なれ　デアルガマア

此のなり ハ俗ホワイナリといふ、咏嘆のなまりるれの添ハりてなりなるれと運らけるうて、四階のなりとハ異なり、四階のなり ハホありのつゞまりうて別なり、此の所のなり ハあとへバ古今ふ難波なるなあらの橋もつくるなり 今ハ我ゞ身をなるゝ あとへむ、又みゝ野の山のあら雪つもるらゝふるさと寒くなりまさるなり、又秋風ふもつうりかゝぞ聞ゆるたゞ玉づさをかけてきつらむ、後撰ふ曉のうゝの音こそ聞ゆるれこれを入あひとおもはまいとおもはまいこのバ、是らの類をいふなり、

○むなり　トスルダケ

此のなり、元ハ清うてよみゝをむなり、終止言を受る故ふトりと詞の濁りて辞となれるなり、もゞを添へて解きる例なり、

○ぞよ　トセントスルタメ

此のぞよハ兼てきる意なり、まゝ設なり、これも終止言を受るゞ故ふトりゞを添て解きる例なり、

○ハタ　マア

此のハタハ咏嘆辞まて、四階のむさと異なり、

○と　ト　とハ切れうるを續ぐ辞なり、

ともも　トテモ

ちふ　トイフ　ちふもてふも同意なり、

てふ　トイフ

○な　ナカレ　なハ勿まて禁止の辞なり、

○カシ　サ

カシハ切れ〳〵る詞ハ添ていふ詠嘆辞なり、

○ヨ　ヨウ

ヨハ詠嘆辞なり、

○ヤ　カイ

ヤハ詠嘆辞あり、又疑歎のヤといふ、此の外ヨヨと解をべきヤありてハ略ス、

○ナ　ナア

ナハ詠嘆辞なり、

○モ　マア

モハ詠嘆辞なり、

是らの類なり、さて此の所のハタヨヤナモカシの六種を片假字まて記〳〵たるハ、咏嘆の辞のもの〳〵なり、希求使令のよ、禁止のな指詞のやもハ混ぜざらもめむぞためハ片假字もてもの〳〵たるあり見む人志の心得てよ、

○四階の辞の俗解并ニ名ハきへ〳〵もらの事

栞ハ載たるハ、あなハ〳〵ありをとむありぞよはさの八種なれども、是も目標を擧たるまて、おの〳〵種々ハ分れたること前階の條の如し、

○あな　チヤナア　コトヂヤナア

此のあなハあなしのかなの轉じて咏嘆を含める辞となれるなり、故ハ體言を受るときハコトヂヤナア用言を受るときハヂヤナア と解をる例なり、

○ハ　ニ　デ

此のハハ場所をさし辞まて、處ハよりてハデと解をる例なり、又副詞のハハ別ハ意なし、此四階のまと混ぜるらとなれ、

○なり　ヂヤニテアリノデアリ

なる　デアル　ニテアル　ノデアル

なれ　デアルガマア　ニテアルガマア　ノデアルガマア

○此のなりハふありの約言まて、漢字の在の字まあるれり、俗ふヂヤナリといひて、三階のなりと區別をあるとゝバ古今まことあらバ思いづとやもいひをそぬあぞよの中の玉あをきなる後撰ふあいれてふことふもろ〳〵ハなるれどもいをぞハえらそあらぬりのなれ、千載ふ宮城野の萩やをゝろのつまもあらむ花咲〳〵ようらゑのいろなる是らの類をいふなり、

なりけり ノデアツタワイ
なりける ノデアツタデアル
なりけれ ノデアツタガマア
ならむ ノデアラウ
ならむ ノデアルデアラウ
ならめ ノデアラウガマア
ならまし ノデアリマシヤウ
ならまし ノデアリマシヤウデアル
ならましを ノデアリマシヤウガマア
ならし ノデアルサウナ
ならし ノデアルサウナデアル
ならしを ノデアルサウナガマア
ならむを ノデアラウナラヨイ
ならず ノデナイ
ならぬ ノデナイデアル
ならね ノデナイガマア

ならど ノデアルマイ
ならで ノデナイデ
○を ヲ
○と ノト
此のとハ、三階のとゝハいさゝか異あり、のとの意ふ解をる例なる故ふ、俗よノトのとといふなり、
○だあり ダケニテ
此のだありハ物を計るなり、連體言を受るゞ故ふ、トスルといふ言をそへ、ばゝそ、たゞちよダケと解をゞゝ、
○ものふ モノトセンタメ
此のものふハかよの轉じたるふて、豫てをる意なれど、三階のものふとハ聊の異ゝ、俗解を見合せて知るべゝ、
○まゝ マアマタ

此のもゝハ漢字の將ふあゝれり、故ゝ三階のもゝとハ異まゝ其の意ハ俗のマアマタなり、本居翁ゲモマタと解したるも大略おなじ意あり、散木集ふちぬの海浪ふただゝふうきゝゝのうきを見るもゝゆゝしゝあまけりとある是らのもゝなり、

より	ヨリ ヨリマア
まで	マデ
の〳〵	バカリ
ゆゑ	ユエ
から	ユエ ヨリ
もの	モノ
ものを	モノヲ モノヨ

漢字の自ふあゝれり○より以下なべふまゝ至るまでハ栞まふ載せざる辞なり、漢字の迄ふあゝされり、漢字の而已ふあゝまり、

ものから	モノナガラ
ものならぬふ	モノデナイノニ
だふ	デモ
さへ	マデ
もら	ソレ
ごと	ゴトシ
なべ	ナラビ ナラビニ
なべふ	ナラビニ

是らの類あり、

此の所の末尾ふ舉たる數種の中ふハ、まゝを添へゝこのら

よさへふすらよあどもいへり、但し是ハ副詞のよあり、
又ゑふさへすらのことよ付てハ、故人の説ハさまゝあれど
も、未ざりきやうなれバ、一ゑう左よいふべし、
ゑふのよハ四階の辞のふをのゑハあらゑ、だよといふ一
つの辞あり、まゝ一種をゑよといふあり、をの下ふあるだふ
あり、俗ふソレデモと解るあり、まゝゑよもと下ふもを添
ていふときハ、俗解デモマアなりもべをだよハ俗ふデモと
いふふおれど、
さへハ俗解マデあり、下二段のそへの義あり、さてそへハソ
ハセゑて物を副へくこれまでもとちらを入るゝ意なる

もあり、本居翁がそひありといへるハ近けれども、四段言ふ
れど自他あゑひてゑろし、土佐日記ふ「ゑもめさへゑふ浪と
みゆらむとあり、是らを味ゑふ麁し
すらハ万葉ふ直の字まゝ尚の字をあてあり、故ふなほの意
といふ説もあり、玉霰ふもらハやもり猶といふ意ふちあ
しといへり、真頼考ゑふもらハ俗のソレといふ意なり、今も
國ふよりてハソラゑどいふ所あり、万葉ふ尚の字を當てた
るハ、尚ハ直の意ある故ふ假借せる文字あれバ、泥むべうら
び、古歌よ「とけてもらぬるほどもふき云々」、家人のもる雨も
らをまつうひふもる」、「君もらもまことの道よ入ぬあり」、など

いへる是らを味ひて見るふ、ソレの意とよく解るか
り、もらハ其なり、其を轉じてもらといひて辞とせるものな
り、

○五階の辞の俗解

栞ふ載たるハむどどもとヨカシヤナの八種なると此五階の
辞ハ運用もるものハ一種もあることなし、

○で　ッコデ　漢字の故ふあゝれり、
○ど　ナレド　漢字の雖ふあゝれり、
○ども　ナレドモ　漢字の雖ふ當れるうとどふおれど、
○と　ト　切れゝるをつぎいゝ辞なり、
○ヨ　ヨウ
○カシ　サ
○ヤ　ヤア
○ナ　ナア

是らの類あり、

○指辞ふ五條ある事

玉緒ふハ指辞をもも徒、そのや何こそ、の三條とゝなれどさ
てハ指辞足らぬゝして、初學の惑ひ易けれバ、今五條とハあら
ためるなり、あふの辞の足らぬといもゞ、まづのと何とも
軽重の二種あるを一つゝ、又のがを指辞ふ入れざりしハ

足らざるなりさてそのものと何とハ軽重あることふ心つゐ
ぢして變格といふりのをたてゝいとあやゝく論らひたり、
故ふ今ハ初學まもさとり易からむためふのとがを加へま
さがの何の三ツふ軽と重と軽の重とあることをさゝ示を
り、
又玉緒ふハ何の部類ふ何ゝたれのいのでのなどの類を擧
げられど、是らハ何の部類まふあらぐゝしてのの部類あり、因
りて今あらためて、もの徒がのぞやのの何こそ の五條と
ハなゝつるなり、なほくわゝくハ其條々ふ於ていふべし、

○もの徒の指辞の事

もの徒ハ軽き指辞なり、そハ徒ずとも自然ふ切るゝ詞ふ
れだもものゝ指辞あるふ於てハ、勿論のことなり、もものハ
終止言の結びまて、ももハ體より受る時ハ指辞あるあり、咏
嘆辞なるありて一様あらぐ、そのところまて見さぶむべし、
人も花も月も雪もの類ハ、おろくハ指辞あり、
万五 たつのまも今も えてゝがあをふゝなるのうやこふゆきてこむあ、
古今春下 今もかもさをふるふらむたちはふの小島のさきの山ふきぜれ、
推考 おやなゝふれなりけめやさくたけの君をやなき、
古今俳諧 むつごともまぐつきあくふあけぬめり、いづらハ秋のなゞてふ夜ハ
是らのもハ咏嘆のもなり、

又辞（テニヲハ）ばかりつゞくる時ハ咏嘆あり、まれふハ咏嘆あらぬもあれ
ども、それハ甚軽くして咏嘆ふひとし、一二をいたゞくとも、よ
もても、をも、の類あり、但しけるもつるも、ぬるもたるもの類
ハ、連體辞ばかりつゞきたれど辞（テニヲハ）ばかりつゞけるもあれど指
辞なりさるハ言ふも聞くも見るも戀ふるもと連體言より
つゞくと同例なれどそのし、
又くしき志く志志きのくしくより受る時も咏嘆なり、淺く
も深くも戀しくも悲しくもの類なり、又指辞の上（カミ）ふある時
もおもゝぞもぞもやもやもこそもこその類なり、
もハ物をとりつくる意あり、彼れも是れものもの如し、今（オヒレ）予ぞ指
辞のもとハ此の意を充分ふもてるはもあり、志の心
得てよ、さてその軽重の大意を示さんふ、先ものをうさゝみて
いふことをつきまふ屋し、
古今十三 人ハいさ我なき名のをしけれハ昔も今もしらぬとをもむ
土佐日記 男もすといふ日記といふものを女もしてをろむとそをるなり
うゝらの類あり、さてうやうよ二つうさねてあるハ指辞の
中なも一層軽くして其のちのらをいをゞ徒とおれどほどふ
り
又次の歌の如く、一方をのゝいひて、一方を含蓄ちつるもも

ハ、其のちからありて下へかゝるもまさつゝ、故ふたつのふ
る指辞といふべし、

古今一 人ハいさ心もしらず故郷ハ花ぞむかしの香ふにほひける

同 春の来たてるやいづこ吉野の山ふ雪はふりつゝ

同 ときハなる松のみとりも春くれバ今ひとしほの色まさりけり

是らの類をいふ、左の歌を見てわきまへふべし

指辞 重 含蓄 春ハ来ふけり春もくれゆく　冬ハ冬スギタガ春ハ来タワイ花モ散タガ春モクレユク

軽 畳用 冬ハ来ぎ春ハ来ふけり花もちり春もくれゆく　冬ハスギテ春ハキタワイ花モ散テ春モクレユク

詠嘆 重 畳用 見てハゆきゝてハゆく見てもおもひきてもあるふ　見テマアユキキヽテマアユク見テマア思ヒキヽテマア思フ

軽 単用 見てハゆくきてもあるふ　見テマアユク聞テマア思フ

のハ玉の緒よハぞと同じほどの指辞ながらもの結びすゝ
切れ〳〵るハ變格ありとあれど、こはのふ軽重ある様知られ
ぬるのことなり、左の歌どもを見てさとるべし、

古今四 待人ふあらぬものゆゑ初雁のなきなくこゑのめづらしき哉

千載六 玉ぼこさゝる涙のこゝる心ちしてをぐらゝ空ふ雁のなくなる

是らのハ軽く指して、のろく結べるなり、ゆゑふ軽ののと
いふ、重のヽ事ハ次ふいふべし、

因ふ云ふのハ軽重とすゝ體言をのミ受て、用言をうくる
ことなゝし、用言を受るゆゑあらバその用言ハいひを
なして體言となりぬるものと知るべし、ちゝき世の人ハ歌

などに「落つるのと思ひける哉」「霧のふるのと思ひけるこれ」などいへるなどひもをなじく見ゆれど、こはひがごとぞよ、

徒とハ指す辞の無きをいへるにて、これも結びに軽重あることのに同じ、その軽格ハ玉の緒に多く證歌を舉げられバ、誰もよく志れることなれど、詞の栞の順序によりて、まづここに證歌三首を舉ぐ、重の格ハ次にいふべし、

古今九 夜を寒みおくはつ霜をはらひつゝ草の枕にあまたゝび寐ぬ

後拾廿 今よりハあらぶるこゝろましますな花のみやこにやしろ定めつ

万八 我君にわけハこふらしたまひたるつばなをはめどいやせにやす

などの類なり、

○がのゝ指辞の事

がの がものもおれどほどの辞あり、此のがのハ形状言のくしきなくしき同一格の四階のきりにて結ぶときの指辞に限る格なり、これを軽重（軽と重との間なれバかく名づけつ）のがのといふ、

古今十三 うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人めをよくと見るがわびしさ

後撰三 風をだにまちてぞ花のちるべきに心づからにうつろふがうさ

古今四 秋はぎを志がらみふせて鳴鹿のめにハ見えずておとのさやけさ

後撰二十 夕されバねにゆくをしの獨して妻こひすなる聲のかなしさ

是らの類をいふあり、さて此の見るおもびしさ、うつらふおもうさといふべきを、見るハもびしさうつらふハうさとやうよいふハ違格なり、用ゐるなら〻、又見るおもびしき、うつらふおもうきあぞいふも違格なり、そべく此のがのの指辞の下ハさしさけさしさけさして結ぶ格なりと知るべし、

○ぞやのの指辞の事

ぞやのの　のぞハソレの意なり、もとおれ〻性質なして、他をさし置て、一方をさん〻辞あれど、もとハ重くさん〻辞なり、やハ柔らかなる性質なり、大らかの疑ふ意を志めん〻辞なして、のハ緩なり、のハ堅き性質なり、疑の辞あれどもやふ比較きバ、迫りて疑ふ意あり、のハ柔らかなして穏やかなる辞なれバ、別ふとりたて〻いふへきほどの意なり、

あとへバ花ぞさくなる、春ぞ立けるといふハ、花ガソレサイタデアル、春ガソレタツタデアルといふことなり、花やさくらむ、春やたつらむといふハ、花ガ大カタサクデアルダラウ、春ガ大カタタツデアルダラウといふことなり、花のさくらむ、春のたつらむといふハ、花ガ十ニ九つサクデアルダラウ、春ガ十ニ九ツタツデアルダラウといふことなり、花のさくなる、春のたつなるといふハ、花ガサクデアル、春ガタツデアルのなり（是ハ重ノ）といふことなり、此の例をもてよろづを味ひ

知るべし、

古今十二 ひとりして物をおもへば秋の田のいねしなるべのそらといふ人のかき

千載四 宮城野の萩やをしかのつまなるらむ花さへしをれ声のいろなる

これらは、玉緒三轉證歌の條ふ擧げたる歌まて重のものなると、

○何の重の指辞の事

何 はもとより軽重なき辞なれども、栞の圖ふ軽重と二様ふあげたるものと同様にてうくる辞の軽重よりて、區別をあらはすなり、さて何は疑の意を示す詞なれば、體言にても然るべきやうなれども、先達これを指辞とせるは、ちの心得てさまたげあきのごとならば、益あればちまぎふべし、その疑

の軽重は、結辞の軽重ふちまぎふものなり、その軽のかたは次なるが何の條ふ示すべくれば、此の所はは重の例をのこちめ、

古今十一 瀧つせの中ふもよどはありてふをなど我戀のふちせとそなき

古今六帖 みくまの浦のちゐゆふいくうさね我をぶ君がおもひなぐつる

是らの類をいふなり、證歌は少と多くあれど省きつ、

○こその指辞の事

こそ はぞを一層はなくいふゆゑふ、コソと迫るなり、かく迫るゆゑに、此の結びは却りて後弱くして、詠嘆の意あり、故ふ已然言をもて結ぶ例なり、これ迫るはあくりてゆるきふ應

ぞる理あり、

古今十四 宮城野のおあらのこすぎ露をおもみ風をまつごと君をこそまて

天智記 みをしぬのをしぬのめの鮎こそは島へも遠き云々

是らの類をいふなるべし、證歌いと多けれど省きつ、

○ぞ何は軽の事

ぞ何 これも軽重あれど、軽きをいふものとおもはれどなほ指辞あり、

後撰九 秋の田はいねてふことをかくしつゝ思ひ出るぞうれしけもあり

六帖 世の人はいとけるものを我為はなしといとぬふたれぞうきをもと

万四 日のくれふうをひの山をこゆる日はせるのぞ袖もさやよふらしつ

後撰十一 戀しきも思ひこあつゝあるものは人ふもとるるをこぞるなり

同九 くやくと待つ夕ぐれと今はとそのへるはつといづれまされり

新勅 高砂のをのへはきくらたづぬれをみやこのみきいくへ霞こめぬ

金葉四 淡路しまうゝふ千鳥のなくこゑはいくよ夜ねさめぬをまのせきもり

是らハ皆ぞの軽き格何の軽き格なり、此の類なほあれど省きつ、

○ぞは重の事

ぞの重 ぞの重の結びハ、玉緒の三の巻なも見をしるべし、

古今十九 さうらしらふ夏八人まもさの葉はさやく霜夜をもぞひとりぬる

万二 さゝ波のもぞのさゝれなるもちくくふつねもと君ぞおもはせける

拾遺一 ひとおやどの梅の立枝やみえつらむおりひのわのふ君がきませる

などの類あり、

○徒の重ね事

徒の重 徒の重の結びハ、玉緒ふ變格とて擧げたる中ふあほ

あり、

後撰十六 數あらぬ身をおも荷まそよ野山高きなげきをおりひらりぬる

拾遺十五 かゝはあるつくまの神れつくゝと我身ひとつふ戀をつゝゆる

などの類なるその餘もあぞらくゝ知るべし軽の結びい上

ふいへり、

○希求使令ふ係るもの徒ね事

又希求使令ふ係るはもの徒をはもの徒の重といふい、栞の圖ふ

擧たるが如しそハ下二段加行變格、佐行變格の一の音まこ

四段奈行變格、良行四段一格の五ね音あり、されもをべてふ

ハるゝらびさて重のもの徒と名付しふまゝの結ぶ辞の重

きふるゝて、名ばけたるまて、上のがの何などの例の如し、

古今十六 深草の野べのさくらし心あらばことしばかりハ墨そめふさけ

万十 朝ゆゝわが見る柳うぐひもの来ゐるくなくべき森まえやなれ

などの類なり、

因ふ云ふ指辞ハもべて上ふいへる如く五條まて、その辞

ハ五十音の上と下との兩端の音ねうちより取り用ゐし

あり、兩端の音とハ、一の音と五の音とをいふなり、其の證ハたものたハ一の音なり、もハ五の音なり、がのぬハ一の音ありのハ五の音あるぞやのけぞハ五の音なり、やハ一の音なり、をハ一の音あり、まことそハ五の音あるぞ、さて此の兩端を詞の首尾ふて、これを材木ふ〻とへバ端をきりて杭(くい)ふ用ゐるごと〻、然れバ言語ふ於ても指辞ハ言葉の杭(くい)あり、此のくさびあるゞ故ふ言語動ゐむたゝ〻よゝ〻ならぞ、これよく杭を用ゐれバ家のうゞてのぬふゐれバ、

○變格といふ事

變格とハ、本居宣長翁ゞ私ふ名付ゝる名あり、其の譯ハ翁ゝ年来考へられて、指辞ハそも徒ぞのや何こそと、三條ふさゞめ、てをは紐鏡を著ハ〻、まゝ、其の證歌を擧げて辞の玉ゝ緒を著ゝされゝるハ、實ふ未曾有の卓見あり、さてその中ふ右の三條ふをもらぬものどゝ出来ふゝるぞハ玉の緒の二卷ふあげたる、

後撰一 ふる雪ゝこのもろ衣うちきつゝ春きふなりとおどろかれぬる

同卷六 數ならぬ身をおも荷ふてよゝ〻の山高きあけきを思ひこりぬる

以下略ハこれらハ皆徒の重の結びあり、さてまゝ、何の軽の結びあるゝ

後撰十一 戀〻しきも思ひこめつゝ居るものを人ふもらるゝなきだなふあり

同十二 思ひ出ておとづれしけるに山彦のこゑへかへりぬこゑのみあり

金葉二 夏のよの月まちわびの手すさびに岩のもとにうづいくむすびつ

堀川百首 逢見ての所しの戀にくらぶれば待しの月日もあはれならぬかな

是らの類をもくべて變格とし〻特別とあるべしかれども別格の意にて違格とし〻たるはいまあらばかくさだめられしことといふもいへるごとく、軽重の二格あるを見出さばして、偏ふ三條とのゝおもひ定められしるぶ故あり、おのゝきぶ指辞を五ゝと改めたる旨意をよくあぢはひあだ變格といふものハ無きものなりと自らさとるぬだしなるべしく

ハ玉の緒變格辨ふあげたれバ就て見るべし、

○敬語添詞の事

凡言葉づかひの中ふ敬語といふものあり又添詞といふものあり、敬語とハ見給ふ聞給ふの類にて、これもあれもよくもれることなり、此の外ふいまだ一種敬語あり、これハ別にいふべし、此の他ハ波行下二段の給へにて、思ふ給ふるの類あり、思ふ給ふるハ正しくハおもひ給ふるといふなり、されど中昔より轉じてかくもいふことゝなれり、この給へハ給ハせの約なりされど思ふ給ふるハ思ひ給ハるの約なり、これ奉存といふ俗言の意にあれど、然れども奉存ハ此方よりあるひにそもつるなり、思ひ給ふるハ上のめぐらみて、おろかなる身もかく思ひさまいまるといふ意にて、自他ハあるべくど敬もる意ふ

至りてハ、おれ〳〵あのむきなりと知るべし、此の他四段活用まてハ、あのむおさむうたむといふ一の音より、佐行下二段のせへうつゝそ、あのせ給ふおさせ給ふうたせ給ふこいひく敬語となり、一段、中二段、下二段活用ハさ文字を加へて、著させ給ふ見させ給ふ起させ給ふ落させのふ得させ給ふ受させ給ふとやうふいひく敬語となるなり、まゝ三變格より至りてもおれ〳〵ことなり、さてその加行變格、佐行變格、奈行變格、良行四段一格ハ、四段の質の否を試ミむふハ、判然と分る法あり、そハ如何といふふ、加行變格ハ来させといひて来せといいそび、佐行變格も為させといひて為せといいそび、然まぶ四段の性質ふ非るあり、四段の性質ハ、飽かせ押させ打くゞ故なり、されバ直ふせすゞへつゞたせとやうふ直ふせすゞへつゞるハ四段性質ふあらざるものと知るべし、奈行變格ハ、往かせ死かせといひて、往かさせ死かさせといいそび、良行四段一格も、有らせ居らせといひて、有らさせ居らさせといいそび、志のれむ此の二行ハ四段の性質あり、但しこれハ因ふおどろのおくのゝ、

添詞といふハ、あきくもるうちふくとうよろふさしまへてふりまへくたちあざむくれなどのきうちどりさしふりたちの類あり、是ちの詞をそふれバ、その意強くもなり、まゝ軽くもあるなり、さて上の敬語の、給ふ思ふ給ふるの類と添

詞とハ連用言なれども常例の如くてゝを添て見る格ふらべてゝを添てハ聞えぬあり、見給ふを見て給ふうちとハ解を屋このらさる類なるとてゝを添て解すべきハ、通常の連用言なり、

詞乃栞打聽終

明治十九ノ年十月廿日
上野なる韵松亭にて
語学會社竟宴ありける時
よめる
笑東

なほ話さるる
くれこそあらめ
夷とせ屋とて
和けーーー間ゆい
きやしーーーなれと
一首

明治二十三年八月廿三日印刷
同　年同月廿八日出版

版權所有

著者兼印刷発行者　東京府士族　鈴木弘恭
小石川區竹早町十三番地

發賣　中外堂　柳河梅次郎
日本橋區本町二丁目十番地

書肆　中西屋　小柳津邦太
神田區表神保町二番地

回文堂　岩本三二
芝區芝口三町目十番地

定價参拾錢